

## アイロニー研究の現状と展望

林田三重 教育学研究科院生

高橋知音 教育科学講座

本稿では最近のアイロニー研究を展望することで、アイロニー研究において考慮すべき変数を明らかにしていった。同じ目的で行われた研究を比較したところ、結果に一貫性が見られなかった場合もあった。その理由として物語と発話の統制が不十分であったということが考えられる。今後は刺激材料を慎重に統制することが望ましい。またこれまで受け手の側の要因が十分に研究されてこなかったため、今後は性別に加え、被験者の個人特性とアイロニーの受け取り方との関係を検討する必要がある。

### 1. はじめに

コミュニケーションにおいて、発話者は自分の意図を直接的に言葉で表現するとは限らない。間接的な表現の例として、冗談、ユーモア、アイロニー、風刺などがある。こういった表現の中で、これまでアイロニーについての研究が数多くなされてきた。以前は「アイロニーとは何か」といったようにアイロニーの定義を模索する研究がなされてきたが、最近ではアイロニーを用いることで得られるコミュニケーション上での利点、効用についての観点からの研究も多くなされてきている。例えば、西谷(1993)、Roberts & Kreuz(1994)は、「アイロニーによってさまざまな伝達目標・含意が伝達される」と主張した。伝達目標、含意には、皮肉、非難などの否定的内容とユーモアや冗談などの肯定的な内容とがある。また Dews & Winner(1995a)、Jorgensen(1996)は、「アイロニーは同じ含意を字義的な表現で伝達するよりも非難や賛辞などの効果を弱くする働きがある」と主張した。そして、Brown & Levison(1978)は、このような効果により、発話者は「面子を保つことができる」とアイロニーの効用について主張した。

今後もこのような研究がなされ、人が「なぜアイロニーを用いるのか」がより明らかとなることであろう。しかし現在まで行なわれているアイロニー研究では、研究者によって異なる結果を導き出している場合がある。なぜそのようなことが起きるのだろうか。その理由の一つに変数の設定の仕方が研究者によって異なるという点があげられる。同じアイロニーを研究するのだから、研究方法も研究者間である程度統一しなければ、同じような目的で行なわれた研究の結果を比較することもできない。

そこで、本稿ではアイロニー研究を進めていく際に、材料、評価方法などに関してどんな条件が結果に影響を与えるか、また統制すべき変数とは何かといったことを、最近の研究を概観することで明らかにする。はじめにアイロニーの定義について述べた後、最近のアイロニー研究を概観しそれぞれの研究においてどのような変数が要因として取り上げられ、結果にどのような影響を

与えているかまとめる。それをふまえ、最後に今後のアイロニー研究の方向性や手続き上、考慮すべき点などをまとめる。

## 2. アイロニーとは何か

これまで多くの研究者がアイロニーの定義について研究してきた。質の公準違反理論 (Grice, 1975), 言語行為の適切性条件の違反理論 (Searle, 1979), 言及理論 (Sperber & Wilson, 1981, 1986), こだます想起理論 (Kreuz & Glucksberg, 1989), ふり理論 (Clark & Getting, 1984), 仮人称発話理論 (橋元, 1989), 暗黙的提示理論 (内海, 1997) などがある。その中でも現在では Kumon-Nakamura, Glucksberg, & Brown (1995) のほのめかし理論 (Allusional Pretense Theory) が有力である。Kumon-Nakamura et al. は「アイロニーは成立しなかった期待に婉曲的に言及しつつ、発話行為の適切性条件を違反している表現である」と述べた。例えば、テニスの試合でいつも一回戦負けのチームに対して、「あなた方のチームは強いですね、待ち合わせに遅れてきた相手に「早く来てくれてありがとう」というアイロニーが考えられる。これらの場合、前者には「試合には勝つべきである」、後者には「時間を守るべき」という社会的な期待があると説明できる。また、前者では事実とは全く逆のことを述べている点で、後者では感謝すべきでない状況で感謝しているという点で語用論的に不誠実である。

近年多くの研究者がこのほのめかし理論で定義されたアイロニーを扱っている。つまり他者に期待を裏切られた、失礼なことをされた、被害を被ったなどのネガティブな状況で、その人に向けて発するアイロニーに焦点を当てて研究を行なっている。しかし、この理論のアイロニーが成立する条件を部分的に満たすような表現もアイロニーと共に研究されている。例えば、期待に言及してはいないが、発話行為の適切性条件を違反している発話がある。それにあたる発話として、テストでよい点を取った友達に「悪い点数だったね」というように、社会的に望ましいことをした人に対してネガティブに評価する発話や、それほど深刻でない状況で「世界の終わりだね。」と大げさに表現する発話などがある。本稿では、アイロニーと共にそういった表現も合わせて見ていくこととする。

## 3. アイロニー研究において考慮すべき変数

ここでは最近のアイロニー研究でどのような変数が要因として取り上げられ、それが結果にどのような影響を及ぼしているかをまとめる。具体的には、取り上げられた発話のタイプ、発話が生じる状況の深刻さ、発話者と受け手の関係、受け手 (被験者) の性別などである。これに加え刺激材料を作成する手続きについても言及する。

### (1) 発話の種類

先ほども述べたように、アイロニーにはこれと言って決まった定義はなく、いくつかのタイプが考えられる。またアイロニーとそうでない表現との間にははっきりとした境目がない。よってアイロニーと一口で言っても、様々な種類があり、またそれに限りなく近い表現が存在すること

となる。ここでは、様々なアイロニー表現、およびアイロニーに近い表現を扱った実験を見ていく。

まず日本語の敬語に注目した研究から見ていく。Okamoto(2002)は、発話者が受け手の間違い、不品行などについて批判的な発言を行う状況を設定した。まず、ネガティブな状況をポジティブに表現するアイロニーと状況のネガティブさをそのまま表現した字義通りの発話を作り、さらにそれぞれにおいて敬語表現を加えたものと、そのままのもの 2 種類の合わせて 4 種類の発話を用いた。その結果、アイロニーにおいては、敬語表現のあるなしによってアイロニー性に差はみられなかった。しかし、字義通りの発話の時は、敬語表現の方がそうでない表現よりもアイロニー的だと評定された。ユーモアに関しては、アイロニー性と同じ傾向がみられた。攻撃性に関しては、敬語表現の方がそうではない表現よりも高く評定された。つまり批判的な文脈で用いられる敬語表現は、アイロニーほどではないが、直接的な表現よりもアイロニー的であり、より攻撃的でまたユーモアがあると認識されることが分かった。

Kumon-Nakamura et al.(1995)は、英語における丁寧な表現に注目した。彼女らは、発話者が受け手に迷惑をかけられ、受け手を批判するという状況を設定した。批判は過度に丁寧な要求、適切な丁寧さの要求、丁寧でない要求の 3 種類を用意し、それらを比較した。その結果、過度に丁寧な要求は、他のものよりもアイロニー性が高く評定された。また過度に要求は、丁寧でない要求よりも失礼ではないと評定された。また、過度に丁寧な要求は、丁寧でない要求と同じくらい相手を侮辱できるという結果が得られた。つまり、過度に丁寧な発話は、丁寧でない表現よりもアイロニー性が高く、受け手に失礼であると感じさせることなく、侮辱することができる表現であると言える。

次に、ネガティブな状況を控えめに評価した表現に注目した実験を紹介する。Colston & O'Brien (2000b)は、控えめ表現、ネガティブな状況をポジティブに評価したアイロニー、状況をありのままに表現した字義通りの発話の 3 者を比較した。その結果、控えめ表現はアイロニーよりも状況との食い違いは少ないが、字義通りの発話よりは食い違いが大きいということが示された。また受け手は、控えめ表現をアイロニーよりもユーモアがあるとは感じないが、字義通りの発話よりもユーモアがあると感じるようだ。さらに、控えめ表現は、アイロニーほど発話者が表現する非難を感じさせないが、字義通りの発話よりは感じさせる。発話が発話者の面子を守っている程度は控えめ表現とアイロニーでは差がみられなかったが、いずれも字義通りの発話よりは大きいと評定された。このことから、控えめ表現は、アイロニーほどではないにしても、アイロニーが受け手に与えるものと同様の影響を、与えることができると言える。

これに対し、ネガティブな状況を大げさに評価した表現についても同様に比較した実験がある。Colston & O'Brien(2000a)は、大げさ表現と字義通りの発話、アイロニーの 3 者を比較した。その結果、状況との食い違いの程度、知覚されるユーモアの程度、発話が発話者の面子を守っている程度の全ての評定項目において、大げさ表現はアイロニーよりも低く評定されたが、字義通りの発話よりも高く評定された。つまり、大げさ表現においても控えめ表現と同様に、程度の差こそあれ、アイロニーと同様の影響を受け手に与えることができる。

7種類の発話を比較した研究もある。Leggitt & Gibbs(2000)は、発話者の感情と反対の内容を受け手に伝えるアイロニー、批判的な意味合いが強いアイロニー、大げさ表現、控えめ表現、ネガティブな冗談、修辞疑問、直接的な表現の7つの発話を比較した。その結果、控えめ表現、ネガティブな冗談と感情と反対の内容を伝えるアイロニーは、ユーモアを含みながら受け手を批判することができるという特徴を持っているということが分かった。これに対し大げさ表現、批判的なアイロニーと修辞疑問は、受け手の行動上の問題を指摘し、強く批判することができるという特徴を持っているということが分かった。

最後にポジティブな状況をネガティブに評価した発話に関する研究について述べる。例えば、塵一つ落ちてないきれいな駅に対して「なんて汚い駅なの！」(Kumon-Nakamura et al., 1995)というような発話がそれに当たる。Kumon-Namura et al.(1995), Colston(2000), Pexman & Olineck(2002)の実験から、ポジティブな状況をネガティブに評価する発話は、直接的な賞賛よりもアイロニー性が高く、よりネガティブな印象を受け手に与えるということが分かった。しかし、ネガティブな状況をポジティブに評価するアイロニーほど、アイロニー性が高くなく、ネガティブな印象を受け手に与えないということも分かった。つまり、ポジティブな状況についてネガティブな表現をする発話は、“弱い”アイロニーであると言える。

これらの研究から、アイロニーの定義とは完全には一致しないが、直接的な表現よりも批判の意味を強める、発話者の面子を保つなど、アイロニーと同じような働きをする発話があることが分かった。よって今後は、アイロニーと定義されている発話だけでなく、それに近い表現と思われるものも合わせて研究していく必要がある。

また、同じ状況で同じことを伝えようとしても、言い回しが少し変わることで受け手に与える印象も変わってくるということが分かった。今後は、状況の質と発話タイプを操作して研究を行なうことによって「このような状況においては、この発話が効果的だ」といったようなことを明らかにできるかもしれない。

## (2) 状況の深刻さ

相手の発言を理解する時、我々はその発言の背後にある様々なものを手掛かりとしている。例えば、遅刻をしてしまった時友達に「早く来てくれてありがとう」とアイロニーを言われた場合、5分遅れた場合と1時間遅れた場合とでは受け取り方が異なってくるだろう。ここでは状況の深刻さに注目した研究をまとめた。

まず、アイロニーの評価が、状況の深刻さによってどのように変わってくるのかに注目した研究から見ていく。Gerrig & Goldvarg(2002)が行なった実験では、量的物語と感情物語の2種類の物語が用いられた。量的物語は、順位や数値などの状況の深刻さを客観的に判断できる記述がある物語であった。彼らは深刻さが高いものを高深刻条件、低いものを低深刻条件とした。感情物語は、登場人物の主観的な感情を扱った物語であった。彼らは、登場人物が困難に陥った原因を記述したものを高深刻条件、原因の記述を削除したものを低深刻条件とした。被験者には、それぞれの状況で発せられるアイロニーがどのくらいアイロニー的であるか評定させた。その結果量

的物語、感情物語共に高深刻条件の方が、低深刻条件よりもアイロニー的と評定された。

次にアイロニーから引き起こされる感情の程度が状況の深刻さによってどのように変わってくるのかに注目した実験を2つ紹介する。Jorgensen (1996)は、ささいなこと、馬鹿げたこと、不注意なことを主人公が行なう状況を低深刻条件とし、主人公が深刻な間違いをし、もう一人の登場人物に害を及ぼす状況を高深刻条件とした。被験者は、物語の主人公になったつもりで、それぞれの状況でもう一人の登場人物からアイロニーを言われるあるいは直接的な批判をされることで引き起こされる感情の程度を評定させられた。低深刻条件の時に、アイロニーは直接的な批判よりも冗談性において高く評定され、また高深刻条件では受け手である被験者の面子が脅かされると判断された。また友好的な感情においては、低深刻条件でのアイロニーを最も高く評定し、高深刻条件での直接的な批判を最も低く評定した。つまり、状況がそれほど深刻でない時は、直接的な表現よりもアイロニーを使う方が、ポジティブな印象を受け手に与えることができると言える。

Colston(2002)は、物語の主人公にとって悪い結末である状況と、主人公にとって悪い結末ではない状況とを比較した。被験者には、物語の主人公になったつもりで、それぞれの状況でもう一人の登場人物が発するアイロニーあるいは字義通りの発話がどのくらい衝撃を与えるものであるか、発話者の非難をどの程度と解釈するか評定させた。その結果、状況によって被験者が受けると思われる衝撃の程度は、発話の種類に関係なく悪い結末の時の方がそうでない時よりも高く評定された。また受け手が感じる非難の程度においては、悪い結末の時は、アイロニーの方が直接的な発話よりも高く評定され、悪い結末ではない時は2つの発話に差はなかった。つまり、状況が深刻でない時は、アイロニーと字義通りの発話では、受け手が感じる非難の程度に違いが見られない。しかし状況が深刻になると、アイロニーを言われた時の方が、字義通りの発話を言われた時よりも発話者に責められていると感じる。

これら3つの実験から、状況が深刻になると受け手は、アイロニーをよりアイロニー的であると解釈し、またアイロニーによってよりネガティブな感情を引き起こされることが分かった。

最後に状況の深刻さの基準の設け方について述べる。これらの3つの実験では、状況の深刻性を実験者自身が設定している。しかし実験者が深刻だと思っても、被験者はそうは思わない場合もあるだろう。状況が深刻であるかそうでないかは、アイロニーを受け取る被験者が決めることではないだろうか。今後実験を行なう際は、被験者の母集団に属する別の被験者に物語の深刻性を評定してもらって、物語の深刻さの高低を分けてから実験を行なう必要があると考えられる。

### (3) 発話者と受け手の関係

「この人にきついことを言われてもあまり傷つかない」、「この人が話すことは、全部嫌味に聞える」、「こいつだけには言われたくない」といった発言を耳にすることはないだろうか。このように我々は、発話者が発した言葉を受け取る時、発話の内容はもちろんだが、文脈そしてその相手と自分との関係をも考慮に入れて解釈する。ここでは、アイロニーの受け手と発話者の関係性

に注目した実験についてまとめる。また、被験者がどのような立場で発話を評価するか、すなわち発話者と被験者の関係性による影響も検討する。

Okamoto(2002)は、社会的地位と敬語との関係に注目して研究を行った。この実験で用いられた物語は、受け手のそれほど評価するに値しない行動あるいは知識について、発話者がお世辞を言うという内容であった。発話者の地位は、受け手よりも高い条件と低い条件の2つが設定された。また発話は、敬語使用条件と敬語不使用条件の2つが用意された。被験者はお世辞の受け手になったつもりで、お世辞を評価することが求められた。その結果、受け手が発話者よりも地位が低い時、受け手は発話者の発言が敬語であるときの方が、敬語でない時よりもアイロニーであると感じるということが分かった。また、受け手の地位が高い時はその逆の結果となった。攻撃性においてもアイロニー性と同様の結果であった。つまり、日本語発話者においては、敬語が適切に用いられない時にお世辞をアイロニーと感じ、またより攻撃的と感じると言える。

また発話の評価者である被験者がアイロニーのターゲットであるか、他の人がアイロニーを言われているのを横で聞いている第三者であるかによってアイロニーの評価が変わってくるかどうかについての見解は2つに分かれている。西谷(1993)は、受け手が第三者の立場にある場合には、受け手は発話をより深刻なものと判断し、ターゲットである場合には、より深刻でないものと判断すると主張している。これに対し、Dews & Winner(1995b)は、被験者がアイロニーのターゲットである時は、第三者の立場にある時よりも、アイロニーをより批判的であると判断し、発話者との関係がよりネガティブであると判断すると述べている。また彼らは、アイロニーのターゲットである時は、第三者の立場にある時よりも発話者との関係がよりネガティブであると判断すると主張している。さらに彼らは、初めて会った人からアイロニーを言われた時は、知り合いから言われた時よりもネガティブに感じると主張している。

このように被験者と発話者との関係が発話評価に及ぼす影響としては、第三者の立場である場合に発話をより深刻なものと判断するという主張と、ターゲットである場合により批判的だとする主張に分かれている。同じ目的で行なった実験にも関わらず、このような違いが生じたのはなぜだろう。両者の刺激材料を比較すると物語の作り方が異なっていることが分かる。西谷が用いた物語は一文の短いものであったが、Dews & Winnerの物語は6から7行程度だった。このように物語の文章の長さが異なることで、被験者に与える情報量が違ってくる。与えられる情報が少ない場合は、被験者自身の想像に頼る部分が多くなるため、人によって物語の捉え方が異なってくる。また与えられる情報が多すぎると、被験者が自分自身のこととして考える余地を与えず、「この物語の登場人物ならどう考えるか」と、自分と切り離して評定を行ってしまう可能性もある。

また、西谷は当事者条件の物語の主語を「あなた」としており、Dews & Winnerは登場人物の名前を用いていた。このことから、西谷の実験で被験者は当事者条件の時、普段の自分自身のことと照らし合わせて評定を行っており、一方Dews & Winnerでは、その登場人物がどう感じるかを想像して評定を行った可能性がある。

これらの実験から、受け手と発話者の地位、発し手との親密性、受け手がアイロニーのターゲ

ットであるか否かによってアイロニーの受け取り方が異なってくるということが分かった。しかし物語の長さや、登場人物が被験者自身であるかどうかで、評定が変わってくる可能性があることから、今後さらに検討が必要である。またどんな情報をどこまで入れたかを明確にし、ストーリーが発話の評定に与える影響も検討していく必要がある。

被験者にどのような立場で評定させるかということに関しては、アイロニーの定義を研究する場合なら物語の主人公は架空の登場人物でもよいが、ある集団に属する人々がアイロニーをどのように受け取るかを知りたい時には、受け手の主語を「あなた」とする方がよいと考えられる。

#### (4) 性別による受け取り方の違い

人によって言葉の受け取り方は違っている。例え同じ言葉であっても、ある人はひどく傷つき、ある人は気にもとめないといった場合がある。このような言葉の受け取り方の違いはどうして生じるのだろうか。おそらく文化、年齢、性格などさまざまな要因が考えられるだろう。その中でも、ここではアイロニーの受け取り方と性別との関連を調べた実験についてまとめた。

Jorgensen(1996)は、アイロニーから引き起こされる感情の程度が、性別によって異なるかどうかを調べた。彼女はまず、22個の批判的なアイロニーを言われた後に受け手がどのような反応をするかを被験者に想像してもらい、自由記述させた。そして、その反応を4つのカテゴリーに分類した。その中で性差が見られたのは、「面白さあるいはユーモアを感じた」というカテゴリーだった。しかし、上記の22個のアイロニーに文脈をつけたものを評定させたところ、ユーモアの知覚には性差はみられなかった。このことから、アイロニーのみの場合は男性の方が女性よりもユーモアを感じるが、アイロニーが文脈の中に組み込まれると性差はみられなくなることが分かる。しかし、女性は男性よりも、アイロニーを言われると怒りを感じ、発話者が批判的だと感じ、発話者をより失礼と評定した。つまり、女性は男性よりもアイロニーを言われることでネガティブな感情を抱きやすいのかもしれない。

Okamoto(2002)の行なった実験でも、丁寧さ、アイロニー性、攻撃性などの項目では性差は見られなかった。ただしユーモアに関しては、項目分析でのみ女性が男性よりも高く評定した。

この結果は一見 Jorgensen のものと矛盾しているように思われる。しかし、Okamoto は日本語発話者を被験者とし、また発話に日本語独特の敬語表現を用いたという点で Jorgensen(1996)と異なっている。そのため、このような異なる結果が得られたのかもしれない。またこれらの実験は、アイロニーに対するユーモアの捉え方が言語や文化によって異なっているということを示唆しているのかもしれない。さらに Okamoto は、発話者が受け手の行動あるいは知識について評価する場面において、敬語表現を用いた発話に対して女性は男性よりも丁寧であると評定するという結果を出している。このことから日本語独特の敬語表現の受け取り方には、性差が関係していることがうかがわれる。

これに対しアイロニーの受け取り方に関して性差がないとする報告もある。Colston & O'Brien(2000a)は、アイロニーによって表現される非難の程度、受け手が知覚するユーモアの程度、発話者がどれくらい防衛的であるか、発話の内容がどのくらい文脈と食い違っているかとい

う 4 つの評定項目で、性差が見られるかどうか調べた。しかし、どの項目においても性差は見られなかった。

アイロニーの受け取り方の前提となる文脈の受け取り方にも男女差がある可能性がある。永井・高橋・林田(2003)は、アイロニーが発せられる状況によって、男女のアイロニーの受け取り方が異なることを指摘している。彼女らは、ある状況がアイロニーに用いられるか、直接的な発話に用いられるかによって 2 種類の質問紙を作成し、受け取り方の性差を調べた。その結果、アイロニー性、嫌味性、どのくらい腹が立つか、どのくらい気にするかという 4 つの評定項目では、質問紙ごとに結果が異なっていた。つまり、ある状況において発せられたアイロニーであれば、女性の方が男性よりもネガティブに捉え、別の状況では男性の方が女性よりもネガティブに捉え、さらに別の状況であれば性差がみられないといったことが考えられる。

これらの 4 つの実験から、今後性差の研究を進めていく上で以下のようなことに注目していく必要があると考えられる。まず、文脈の統制だ。Jorgensen(1996)の実験からも分かるように、人はアイロニーを理解する時にその背後にある文脈を手掛かりとしている。つまり同じアイロニーであっても文脈の質、内容によって解釈が異なってくる可能性がある。また永井他(2003)からも分かるように、文脈そのものが男女によって異なる捉え方をするものであったなら、アイロニーの捉え方も違ってくる。このことからあるアイロニーの理解のし方が男女によって異なっていると言えるのは、その背後にある文脈の捉え方に性差がみられない場合のみであると考えられる。また先ほど少し触れたように、言葉の受け取り方には言語や文化の違いが関与している可能性もあり、こういった点について今後さらに検討が必要である。

#### 4. 今後のアイロニー研究における材料の統制

アイロニー研究において刺激材料にかかわる要因を統制することは重要である。刺激材料にかかわる要因を研究者間で統一すれば、それぞれの実験結果の比較が容易になる。

まず、物語の統制について述べる。Dews & Winner(1995b)は、64 個の物語を用意し、それらの物語がどのくらい深刻であるかどうかを被験者に評定させ、32 個の物語を採用した。彼らが行なった実験のように物語を統制することで、「このような状況でアイロニーを言われた時に人はこういう感情を抱く」といったように状況の質によるアイロニーの受け取り方の違いを検討できるようになる。そのため今後のアイロニー研究において、物語を設定する際には、状況がどれくらい深刻か、どれくらい発話者が被害を被っているか、といったような基準を設けるべきである。そして、その基準に従って実験者側で状況をいくつか用意し、実験に協力してもらう被験者の母集団に属する人々に、改めて評価し直してもらうべきである。

同様に発話を統制する必要がある。Kumon-Nakamura et al.(1995)は、5 種類の丁寧な表現を用意し、丁寧さの観点から被験者に 5 件法で評定させ、その結果をもとにそれらの発話を 3 種類のカテゴリーに分けた。西谷(1993)は、実験者が提示したアイロニーの定義をもとに被験者にアイロニーを列挙させ、そのいくつかを本実験で用いた。このように発話においても、実験に協力してもらう被験者の母集団に属する人々にあらかじめ評価してもらう必要がある。



また、アイロニーの標的となる人物は、「あなた」つまり被験者自身であることが望ましい。そうすることで、ある集団に属する人々がアイロニーをどのように受け取るのかということを知ることができる。さらに、物語の内容もその集団に属する人が感情移入しやすいものであることが望ましい。Bryant & Tree(2002)は実験者が用意した物語が被験者にとってどれだけ現実味があるかを評定させた。被験者集団の特性を意識した実験であれば、彼らのように物語が被験者にとって感情移入しやすいものであるかどうかを、評定してもらうことも必要となってくる。

ここに挙げた例以外の実験では多くの場合、発話内容や物語の設定される要因が実験者の主観によって設定される場合が多い。実際に意図された通りに条件が設定されたかどうかを評価していなければ、結果の解釈が困難になる。

## 5. 今後の研究に向けて

最後に、ここまでに見てきたアイロニー研究において留意しなければいけない点をまとめると共に、今後さらに研究されることが望ましい領域について述べる。

物語と発話の統制は必須である。物語と発話に関しては実験者と被験者の間に生じる認識のズレを埋める作業が必要である。物語及び発話を設定する際には、それぞれの実験者がどのような状況で発せられるどのような種類の発話を用いるのかといった基準を設けるべきである。そして、その基準に従って実験者側で状況をいくつか用意し、実験に協力してもらう被験者の母集団に属する人々に、改めて評価し直してもらうべきである。また、誰にアイロニーを言われるのかといったアイロニーの発し手と受け手との関係も変数に加えるべきである。そうすることで、ある状況でこのような立場の人からこのような発話を受けた時、人はこういった反応をするということをはっきりとすることが出来る。

発話の評価方法については工夫の余地がある。ほとんどの研究者が、発話の評価に評定尺度法を用いている。しかし中には、評定尺度法で発話を評定させた後挿入課題を挟み、その後発話を自由再生させた実験(Pexman & Olineck, 2002)、発話を言われた後の反応を自由記述させた実験(永井他, 2003)などがある。様々な角度から研究を進めていくために、今後このような評価方法を取り入れていくのがよい。

性別についてはできる限り要因として取り上げることが望ましい。先ほど触れたように、アイロニーの受け取り方は、男女で違いが見られる場合がある。その違いについてはまだはっきりしない部分が多く、今後も性別を要因として研究する必要がある。そのためもし性別を要因としてとりあげないであれば条件間の男女比をできるだけそろえた方がよい。

今後さらに研究されることが望まれるテーマとして、アイロニーの受け取り方と受け手の個人特性との関係があげられる。永井他(2003)は、日本版 MLAM 承認欲求尺度(植田・吉森, 1990)を用い、被験者の社会的志向性とアイロニーの受け取り方との関係を検討している。彼女らの実験では一部であるが、社会的志向性の高低によってアイロニーの受け取り方に違いが見られた。このようにアイロニーの受け取り方を調べる質問紙と同時に、被験者の個人特性を調べる質問紙を実施し両者の関係を検討することが期待される。

アイロニーの受け取り方と受け手の個人特性との関係を明らかにすることで、コミュニケーションにおいて困難を感じている人を援助するための情報を得ることができるともかもしれない。例えば、こういう特性を持っている人はアイロニーによって過度に傷つけられる、ということが分かれば、周りの人がアイロニーを控える、別の言い方を考えるなどの配慮がしやすくなるだろう。また、こういう特性を持っている人はアイロニーを字義通りにしか理解できず、周りとうまくコミュニケーションができないということが分かれば、周囲の人がまわりくどい表現をやめて直接的な言い方をするといった配慮が可能となるだろう。

### 引用文献

- Brown, P., & Levinson, S. (1978). Universal in language usage: Politeness phenomena. In E. Geedy (Ed.), *Questions and Politeness: Strategies in Social Interaction*, 56-311. Cambridge University Press.
- Bryant, G. A., & Tree, J. E. F. (2002). Recognizing verbal irony in spontaneous speech. *Metaphor and Symbolic Activity*, 17, 99-117.
- Clark, H. H., & Gerring, R. J. (1984). On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Social Psychology: General*, 113, 121-126.
- Colston, H. L., (2000). On necessary conditions for verbal comprehension. *Pragmatics & Cognition*, 8, 277-324.
- Colston, H. L., & O'Brien, J. (2000a). Contrast and pragmatics in figurative language: Anything understatement can do, irony can do better. *Journal of Pragmatics*, 32, 1557-1583.
- Colston, H. L., & O'Brien, J. (2000b). Contrast of kind versus contrast of magnitude: The pragmatic accomplishments of irony and hyperbole. *Discourse Processes*, 30, 179-199.
- Colston, H. L. (2002). Contrast and assimilation in verbal irony. *Journal of Pragmatics*, 34, 111-142.
- Dews, S., & Winner, E. (1995a). Why not say it directly?: The social functions of irony. *Discourse Processes*, 19, 347-367.
- Dews, S., & Winner, E. (1995b). Muting the meaning: The social function of irony. *Metaphor and Symbolic Activity*, 10, 3-19.
- Gerrig, R. J., & Goldvarg, Y. (2000). Attentive effects in the perception of sarcasm: Situational disparity and echoic mention. *Metaphor and Symbolic Activity*, 15, 197-208.
- 橋元良明 (1989). 背理のコミュニケーション—アイロニー・メタファー・インプリケチャー— 勁草書房.
- Jorgensen, J. (1996). The functions of sarcastic irony in speech. *Journal of Pragmatics*, 26, 613-634.
- Kreuz, R., & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 118, 374-386.
- Kreuz, R. J., & Roberts, R. M. (1995). Two cues for verbal irony: Hyperbole and the ironic tone of voice. *Metaphor and Symbolic Activity*, 10, 21-31.
- Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., & Brown, M. (1995). How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, 124, 3-21.
- Leggitt, J. S., & Gibbs, R. W. Jr. (2000). Emotional reaction to verbal irony. *Discourse Processes*, 29, 1-24
- 永井小百合・高橋知音・林田三重 (2003). 聞き手の個人特性がアイロニー的発話の受け取り方に及ぼす影響 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 34.
- 西谷健次 (1993). アイロニーと状況特性と含意. 計量国語学, 19, 117-132.
- Okamoto, S. (2002). Politeness and the perception of irony: Honorific in Japanese. *Metaphor and Symbolic Activity*, 17, 119-139.
- Pexman, P. M., & Olineck, M. (2002). Does sarcasm always sting?: Investigating the impact of ironic insults and ironic compliments. *Discourse Processes*, 33, 199-217.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1981). Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (Ed.) *Radical pragmatics*. New York: Academic Press.
- Toplak, M., & Katz, A. N. (2000). On the uses of sarcastic irony. *Journal of Pragmatics*, 32, 1467-1488.
- 植田智・吉森護 (1990). 日本版 MLAM 承認欲求尺度作成の試み 広島大学教育学部紀要, 39, 151-156.
- 内海彰 (1997). アイロニーとは何か?—アイロニーの暗黙的提示理論— 認知科学, 4, 99-112.

(2003年12月15日 受理)